長州藩士井上馨の対外思想の変遷に関する一考察

顔　　龍　　龍

A Study on the Inoue Kaoru's foreign consciousness changes

YAN Longlong

Inoue Kaoru（1835-1915）was a statesman from the Meiji and Taisho eras. In 1862, he and Takasugi Shinsaku planned to attack foreign ministers but falied. In addition, he set fire to the British Consulate in Edo. In 1865, he got the permission that studied in England secretly from Lord, with Ito Hirobumi（伊藤博文）, Inoue Masaru（井上勝）, Yamao Youzo（山尾庸三）and Endo kinsuke（遠藤謹助）.

So far, the research that Inoue smuggled himself into England and studied in London focused on its process and the Shimonoseki's Negotiation. And no one pays attention to his thoughts changes and the essence of his thoughts after he finished his studies abroad. So in this paper. Firstly, this paper will introduce his *Sonnojoi* activities（19th century slogan advocating reverence for the Emperorand the expulsion of foreigners）and study abroad activities during the end of the Edo period. Then this paper will study the thoughts changes from the *Sonnojoi* activities to the absence of opening the country by observing his behavior in *Sonnojoi* activities and the process of study abroad. Lastly, this paper will further study the form and essence of his patriotic sentiment through Inoue's thoughts changes.

keyword: Inoue Kaoru, Sonnojoi, Smuggling abroad, the Foreign consciousness changes

キーワード：井上馨、尊王攘夷、密航留学、対外思想変遷

はじめに

本稿は幕末における長州藩士井上馨の攘夷から開国への思想転向とその思想の内実を考察するものである。

井上馨（1835-1915）は明治，大正時代の政治家で，幼名を勇吉，または友次郎，一時期には聞多と称した。号は世外である。天保６年（1835）11月28日，周防国吉敷郡湯田村（山口市湯田）の萩藩の地侍井上光享の次男に生まれ，農耕に従事しながら，幼少時代を過ごした。17歳の時，萩の藩校明倫館で学び，21歳の時，250石の藩士志道家の養子となった。同年参勤交代に従って江戸にのぼり，蘭学を学んだ。そこで，江川太郎左衛門塾にて砲術を学ぶなど，海防に関心を抱いた。万延元年（1860）藩主の小

性役となり，聞多の名を賜わった。以後，専ら藩主毛利敬親や藩世子毛利定広の側近の侍として江戸と萩の間を往復した。また藩政府からイギリス海軍の研究を命じられ，イギリス船を購入するなどの働きをした。一方で，尊皇攘夷派青年藩士の中心人物の一人として活躍している。文久２年（1862）藩論が攘夷に決すると，高杉晋作と外国公使襲撃を計画したが失敗した。さらに，江戸品川御殿山のイギリス公使館の焼き打ちを行っている。同３年，藩主の許しを得て，伊藤博文・井上勝・山尾庸三・遠藤謹助らとイギリスに「密航留学」した。

ロンドンで萩藩が攘夷を実行して、外国船を砲撃したことを知り，伊藤とともに急遽帰国し，会議において藩主の前で開国論を主張したが受け入れられなかった。しかし四国連合艦隊の下関砲撃で、藩主は欧米の軍事力の威力を目の当たりにし，攘夷が無謀であることを悟った。高杉・伊藤はともに講和の使者に起用され，講和に成功した。第一次長州征伐にあたっては，藩内の所謂正義派を代表して武備恭順を主張し，俗論派と対立する。元治元年（1864）９月25日の藩是を決する会議の帰途，刺客に襲われ，重傷を負ったが，奇跡的に一命を取り止めた。

従来の「密航留学」についての先行研究は，主として井上たちの留学経緯と下関談判に関するものであって，彼の思想転換と留学後の思想の内実には注目していない[1)]。

本論文では、幕末期における長州藩士攘夷運動の具体的な様相を踏まえて，井上馨個人の攘夷行為と密航留学を分析した上で，攘夷から開国への思想的変化を捉えることにする。併せて、井上の思想的変化を通して，彼の藩意識と国家意識の考察を加えたい。

一　御楯組血盟書と英国領事館焼き討ち事件

１　御楯組血盟書

安政５年（1858）に長州藩世子毛利定広は，江戸にのぼり，安政の大獄で幕府に投獄された者は生死を問わずに，すべてを赦免するよう要求した。加えて，水戸徳川斉昭に大納言という官位を贈るよう幕府に要請し，当時の天皇勅使であった大原重徳に攘夷の勅旨伝達を実行させるに至った。幕府は言葉を濁し，すぐには奉勅の意向を受け入れるつもりはなかったが，長州藩世子毛利定広は，天皇の勅意を実現させるために，幕府の老中や他の権力者を訪ねて要請に努めた。その結果，幕府はついに徳川斉昭贈官と安政の大獄の赦免を実行した。しかし，幕府は依然として攘夷については口を閉ざしたままであった。10月になって，さらに朝廷は，三条実美，姉小路公知を派遣したが，二人はその月の28日に江戸に到着した後，速やかに攘夷を実施するように幕府に要請した。幕府は将軍が疾病のため，攘夷することは後に回ると答えた。井上馨，高杉晋作，大和弥八郎，そして長嶺内蔵太らの青年武士たちは，幕府の優柔不断な姿勢に憤慨し，攘夷を早く実施させるために，外国公使を刺殺することで，日本と外国との対立を煽った。

当時の横浜在留の外国人は，土曜日から日曜日にかけて，近傍の景勝地を遊覧する習慣があった。あ

１）犬塚孝明『密航留学生たちの明治維新』（日本放送出版協会，2001年）。
　熊田忠雄『明治を作った密航者たち』（祥伝社，2016年）。

る日，井上馨は，某公使が11月13日の日曜日に武州金沢に遊覧することを耳にした。井上は，公使を刺殺することは攘夷の端を開き，幕府の決断を促す良い手段であると思い，これを高杉晋作と共謀した。しかし，彼らの攘夷の計画を山内容堂が偶然に耳にし，世子定広に伝えたのである。最終的には，高杉晋作・井上馨らの刺殺は定広によって中止させられたが，井上馨は，必ず攘夷を実現させることを同士と約束し，高杉晋作，久坂玄瑞誠らの11人は，文久２年（1862）11月に『血盟書』を作成のうえ花押した。

此度我々共夷狄を誅戮し，其の首級を提げ罷帰，急度攘之御決心被為遊，今般被仰出候　勅意速ニ致貫徹度存詰，発足候處，恐多も　世子君御出馬被為遊候而，壮志感服之至候得共，我等孤立ニてハ心細ニ付，一先帰参，尊攘之実功補佐呉候様御懇切之御教諭被仰付，一同不堪感泣之至，必竟此度之一挙も，　君上を後ニ仕候義毛頭無之，御決心之段奉祈候而之事ニ付，此後ハ益忠誠を励ミ御奉公可仕段申上，引取候事ニ付，此同志中之義ハ，斃るノ迄ハ十三日夜之次第忘却候而者不相叶，百折不屈夷狄を掃除し，　上ハ　叡慮を貫き，　下ハ　君意を徹する外他念無之，国家之御楯となるべき覚悟肝要たり。

同志中一旦連結之上ハ，進退出處尽く相謀り，自己之了簡ニ任すまじき也。

同志中落途有之依歟，又所存相違有之時ハ，何国まで論辯すべし，面従腹誹ハ於武士道愧べき處なり。

秘密之事件ハ父母兄弟たりとも洩らすべからず。万一被召捕八裂ニ逢とも，致露顕等之義有之間敷也。

御楯組中一人たりとも恥辱を蒙る時ハ，其餘之恥辱たり，相互ニ死力を救援し，組中之汚名を取まじき也。

我々共死生を同し，正気を維持するニ付而者，いか計離流顛沛ニ逢とも，尊攘の志屈し撓べからず。

聚散離合を以志を変ずるハ，禽獣と謂べし。幾千万里を隔とも，正義凛然見苦敷振舞有之間敷也。

右同志の契約致違背候時ハ，幾應も令論辯，万一承引無之ニおいてハ，組中申合，詰服ニ及ぶべし。

依而天神地祇ニ誓ひ，血盟する事如件。

文久二年戊十一月

高杉晋作　　（花押血判）
久坂玄瑞誠　（花押血判）
大和弥八路直（花押血判）
長嶺内蔵太実（花押血判）
志道　聞多惟（花押血判）[2)]
松島　剛蔵久（花押血判）
寺島忠三郎昌（花押血判）
有吉熊次郎良（花押血判）
赤祢幹之丞貞（花押血判）
山尾庸造　　（花押血判）

2）志道　聞多惟：井上馨。

品川弥二郎日（花押血判）[3)]

図１　御楯組血盟書[4)]

以上の『血盟書』を見ると，当時の井上馨は，幕末の志士らと「西力東漸」の背景において，幕府の攘夷政策を促すために，徹底的な攘夷思想を持っていたことが分かる。彼の攘夷思想の中身は，他の武士と同じで，藩主のために忠を尽くすことだけではなく，武士としての信義，恥意識などの品性を備えていた。またこの『血盟書』の成立は，次の御殿山公使館襲撃のために動員を行なう基礎を確立したことになるのである。

2　英国領事館焼き討ち事件

東京の南部，品川の西北に御殿山と呼ばれるところがある。幕府は，外国と通商条約を調印した後，この辺りに外国公使館の建設を認め，文久２年（1862）８月に英国公使館が設置されるに至る。当時，イギリス公使館の規模は，在日本イギリスの通訳であったアーネスト・サトウ（Ernest Mason Satow）の日記に記されている。

> この敷地に建造中のイギリス公使館は，一棟の大きな二階建ての洋館で，海に面した高台に立ち，遠方からはそれが二棟のように見えた。大変見事な材木が工事に使用され，部屋はいずれも宮殿に見るような広さをもっていた。床は漆塗りで，壁面には風雅な図案を施した日本紙が張られていた[5)]。

御殿山というのは，幕府開幕の頃に東海道を経由し，参勤交代する外様大名を将軍が送迎した場所であった。その時の高杉晋作は，こうした重要な場所に外国の公使館が建てられることに大いに憤慨した。

３）井上馨侯伝記編纂会『世外井上公伝』第一巻（原書房，1968年），66頁。

４）同書，この血盟書の本文は，井上などが藩邸の物見所で起草したもので，久坂の執筆によるものである，本物は巻物として久坂の家に伝わっていたのを，後年，男爵楫取素彦の許に保存せられ，後に井上が楫取から譲られたものである，三条実美の赤心報国の題字と山田顕義の跋が附せられている。

５）アーネスト・サトウ（Ernest Mason Satow）著，坂田精一訳『一外交官の見た明治維新』上（岩波書店，1960年），78頁。

幕府が攘夷の勅を奉じながら，公使館を御殿山に新築せしめるのは宥すべきことではなく，且つこの地を外夷腥膻の気に汚すのは，吾々同志が見るに忍びない，よろしくこれを一炬に附して，以て金沢一挙失敗を償ふべきである[6)]。

12月以後，高杉晋作を始めとして，井上馨・久坂玄瑞・有吉熊次郎・大和弥八郎・長嶺内蔵太・伊藤博文・白井小助・赤邇幹之丞・堀真五郎・福原乙之進・山尾庸三・及び肥後松木某など13人は，公使館焼き討ちを画策した[7)]。12月12日の夜に高杉晋作と井上馨らは予定通り放火計画を実施した。当時の放火状況は，数十年後の伊藤博文の談話によって明らかになる。

夜になり，公が「井上できたか」。侯は，「抜目があるか」と答えて，手拭の両端に包んだ，炭団大の焼弾を袖から出した。未だ出発に間もある事であるからとて，この二個の危険物を於里（名妓の名前）の部屋の額裏へ隠し，それから元気づけに一同飲始めた。いよいよ公使館に乱入して火を付ける段になると，侯は「しまった，焼弾を於里の額里へ隠したまま，忘れて来た。」といつたので，公等も心配した，そこで目的を達した翌晩，公は侯と一緒に土蔵相模に登り，於里の留守部屋を窺つて，額里を探つて来たので「昨夜いたずらに炭団を額里に隠して置いたが，誰か見つけたらうか。」と尋ねると，今しがた取り出して炭函の中に入れたところであると答へた。その一つを火著で挟んで火鉢に入れようとした，侯は驚いて於里の手を押へて，それはただの炭団で無い旨を語つたところ，於里は「それでは昨夜の焼打は君が為さつでせう。」といつたから，侯は思はず刀に手を掛けると於里は縦容迫らず，「様子は大体解つています。疾うから額裏の品は只炭団であるまいと思えばこそ，後の証拠にならぬやうにと，その夜の中に裏の海へ沈めました。ここにあるのは真の炭団であります。妾は今頃真物の焼弾を家の内におく程の愚人ではありません。」と答えたので，候も男優りの彼女の機智と豪胆とに痛く感服したとの事である[8)]。

幕末に来日したイギリス人記者ブラックが手掛けた『ヤング・ジャパン』に，当時の焼き討ちの状況が記録されている。

目撃者の話では，焔が数カ所からいっせいにふき出すのが見え，炎上中，数回にわたって，火薬の爆発が起った。こうして建物の完全破壊の作業が確実になされた，という。放火犯の仕業に違いない事，または仲間に自分たちの行為を遠くから見張らせていたことも，公然と行われた，というのは火焔と可燃とが功を奏したのが明らかとなると，品川碇泊地の軍艦から礼砲が発射されたからだ[9)]。

6）井上馨侯伝記編纂会『世外井上公伝』第一巻（原書房，1968年），71頁。
7）北影雄幸『外国人が記録した幕末テロ事件』（勉誠出版株式会社，2016年），106頁。
8）井上馨侯伝記編纂会『世外井上公伝』第一巻（原書房，1968年），77-78頁。ここに公とあるは伊藤博文，侯とあるのは井上公を指す。
9）*JR*・ブラック著，ねず・まさし，小池晴子訳『ヤング・ジャパン』（平凡社，1970年），158頁。

明治時代になってアーネストは放火犯を特定した。

二月の初めになって，我々は御殿山の公使館の建物が同月一の夜（訳注　前日，すなわち一八六三年一月三十一日＝文久二年十二月十二日夜の誤り）焼失という知らせを受けた。その後幾年かたって，最も確かな筋から，放火の犯人は主として攘夷党の長州人であったということを聞いた。少なくとも，その中の三人は，後に政府の高官になった，それらは総理大臣伊藤伯と井上馨伯で三人目は誰であったか，思い出せない，この人々がもう大分以前に，海外諸國との交際を廃止する必要があるという始めの意見を放棄したことは，周知の事実である。彼らは今では，国民の欲求と願望とにかなう西洋制度は何によらず日本に輸入すべきであるという運動の指導者になっている[10)]。

以上のように，幕末における井上馨は，当時の武士と共に攘夷運動に参加した。当時の彼の攘夷思想は，周りの武士たちに影響されたナショナリズムの性格をもっていたと思われる。

二　英国への密航

1　密航の理由

文久２年（1862）12月に山縣半蔵・久坂玄瑞の二人は，藩世子の命令を奉じて松代に赴き，佐久間象山を長州藩に招聘した。佐久間象山は，吉田松陰の下田踏海事件で連座されても屈することなく，国是についての考えを松代で発表し続け，以下のように述べている。

兎に角此節と成り候所にては，漢土の学のみにては空疎の議を免かれず。又西洋の学ばかりにては，道徳義理の講究之れ無く候故に，縦令人目を驚かし候程の大事業を成し候と雖も，聖賢の作所と懸隔候所之れ有り。依て是を合併候にあらざれば，完全の事とは致し難く候。其事に就き詩，之れ有り。御一笑下さるべく候。

東洋道徳西洋芸　　東洋の道徳 西洋の芸

匡廓相依完圏模　　匡廓（四角い部分）相依りて圏模（丸い全体）を完す

大地周囲一万里　　大地は周囲一万里

還須虧得半隅無　　還りて須く半隅を虧（欠）くを得る無し

末句の意は，道徳芸術相済ひ候事，譬へば亜細亜も欧羅巴も合わせて地球を成し候如くにて一隅を缺（欠）き候ては円形を成し申さず候。その如く道徳芸術一を缺かき候ては完全の者にあらずとの考に御座候[11)]。

10）アーネスト・サトウ（Ernest Mason Satow）著，坂田精一訳『一外交官の見た明治維新』上（岩波書店，1960年），86頁。

11）信濃教育会編『増訂象山全集』第四巻（信濃毎日新聞，1934-1935），242-243頁。安政元年３月付「小林又兵衛宛書翰」。

その後，「時事を痛論したる幕府へ書稿」[12] と「内問により文聰公に呈したる意見書」[13] を発表して，社会に大きな影響を与えた[14]。二人は象山に面会して招聘の意を伝え，象山は，招聘に応じられないと答えて，種々の海防に関する意見を次のように陳述した。

> 軍艦鉄砲を製造するは誠に目下の急務なるも，全熟ら海外万国の大勢を観察するに，互に有無相通じ富強を図るの有様なれば，我が邦独り孤立して攘夷を断行せんとするも，到底実行し得べき所でない。若し外国と対峙して富強を競はんとせば，よろしい開国の方針を立て海軍を盛にして武備の充実に努むるに若ずと思はる。尤も一身上の事情に依り貴藩の聘用に応ずることができない[15]。

公使館を焼き討ちした後，井上馨は，幕吏の追及を恐れて，京都に身を隠すことにした。その後，文久三年（1863）正月20日には世子定広の小姓役に復帰した。象山招聘に失敗した久坂と山縣は，帰り路で井上馨と出会った。その際，井上馨は二人から招聘の経過を聞いた。同時に二人は象山の海軍論を井上馨に伝えた。井上はその海軍論に魅了され，すぐに「外国行」を決心した。井上馨は次のように述べている。

> 象山から聞いた意見を聞くと云ふと，成程攘夷も宜し攘夷も宜しいがドーしても外国を干戈を交えぬければならぬ，今ま干戈を交ゆるとしても波打際まで戦は出来るが波から先はドーしても海軍でなければならぬ，その準備をしてからの攘夷ならば宜しいが，サウ云ふ準備がなければ無謀の攘夷である，すなわち長州の攘夷は無謀の攘夷であると云ふ話ぢや，其外肥後に永沼流の兵法に詳しい人で何とか云つたが名は忘れたが，其人の意見も矢張海軍を起こさなければいかぬと云ふのであった無論長州でもランリツキ（英名）と云ふ船を買って壬戌丸を称けて用いたこともあつてなんでも西洋の利器は用いねばならぬと云ふ説も起つて居つた時であつたが，軍艦も商船も一つものの様に思つてた時分だから幼稚のものサ，兎に角象山の話を聞いて酷く感じて，攘夷をすれば，尊王，尊王をすれば，攘夷と云ふ様なとをして居つたのでは真の攘夷も出来るものでないと云から洋行の志を起こした，夫れより外国に出で海軍のことを研究して日本に海軍を興さうと云ふ考へが愈よ強くなつた[16]。

当時，山尾庸三と野村弥吉の二人は，以前に函館で英学を学んだことがあって，井上馨と一緒に洋行する希望を抱いており，井上に同行を依頼した。井上は三人の洋行のことを藩世子に懇願して，ついに

12）国立国会図書館『現代日本思想大系』第一巻（筑摩書房，1966年），199頁。

13）佐藤昌介（他）『日本思想大系』第55巻「渡辺崋山・高野長英・佐久間象山・横井小楠・橋本左内」（岩波書店，1971年），313頁。

14）松浦 玲（「横井小楠（1809-69）・佐久間象山（1811-64）・勝海舟（1823-99）：国ノ存亡ニ不動（小特集 近世・近代日本の国家観）」『環：歴史・環境・文明』第57号），274-278頁。

15）伊藤博文［他］『伊藤公全集』第三巻（伊藤公全集刊行会，1927年），29頁。

16）中央新聞社編『伊藤侯井上伯山縣侯元勛談』（中央新聞社，1900年），68-69頁。

藩政府もその三人の洋行を許可することになる。井上によると次のようである。

> 三人御暇被下候はば，於于下心遣仕，外国へ航渡し学校へ入込修業仕度由，兼々内願之趣被聞召上候處，此節之時勢にては，幕府へ御申立にも難相成候間，右内願之趣御許容難被仰付候，乍爾一旦兵端を開，絶交之上にては，外国の長技御採用之思召も難被行届候儀に付，右三人共５ヶ年之間御暇被下，御暇中於于下宿志を遂候様心遣仕，後年に至り罷帰り候はば，海軍一途を以御奉公仕候様心掛可申之旨，御内命被仰聞候。但三人へ対し稽古料として御手元より金子可被立下候[17]。

以上の資料から長州藩は，三人の洋行に賛成していたと読み取れる。そして藩主毛利敬親は「量時度力」の四文字，定広は「思辯」の二文字を親書にして井上馨に授けた[18]。

井上は公使館を焼き討ちした後に，久坂と山縣から佐久間象山の理論を聞き，直ぐに「外国行」の決定を下した。なぜなら井上は、外国の海軍について学びたくて攘夷しようと考えたからである。この時期の井上の思想は，佐久間象山の影響で少々変化していた。井上は，もし外国と干戈を交えるならば，海軍を持たねばならないと考えるとともに，海軍を持つためには，洋行して海軍について研究することが必要だと感じた。この時期の井上の攘夷思想は，前と比べてその本質は変わらず，積極的であった。

図２　井上侯爵家藏：毛利敬親題『量時度力』[19]

図３　井上侯爵家藏：毛利定廣題『思辨』[20]

17）井上馨侯伝記編纂会『世外井上公伝』第一巻（原書房，1968年），86頁。
18）同書，86頁。
19）同書，86-87頁。
20）同書，86-87頁。

2　上海の見聞と攘夷思想の変化及び開国意識の形成

文久３年（1863）４月28日に，井上馨は野村弥吉と共に京都を発して東下の途に向かい，５月６日に江戸に到着した。井上らは江戸に到着後，遠藤謹助も熱心に洋行を希望するとともに，その兄多一郎の周旋で一行に加わることになった。

当時，洋行には費用がいくらかかるか誰も知らなかった。そのため山尾は，井上馨らより数日前に江戸に到着し，英国領事ガワー（Gower）[21] に会って洋行のことを相談し，洋行の費用を聞いた。井上は，山尾から洋行の費用を聞き，再びガワーを訪ねて洋行の意志を告げた後，すべての周旋を懇請しつつ，費用の総額を問うたところ，一人にかかる一年間の費用は，大体千両を要するとの答えであった。ちなみに井上らは，藩主から６百両をもらっていたが，その金額で洋行できるかどうかは理解していなかった。もしイギリスに洋行するならば，５千両が必要であった。ガワーは，井上の洋行の意向に疑念を抱いたが，井上は，自分の持つ刀剣を彼に渡し，「日本武士の魂はこの一物に在る」として固く誓った。井上を信用したガワーは，洋行の周旋を受け入れた。その後，井上馨は，麻布藩邸に赴き，兵学者村田蔵六（大村益次郎）を訪ね，鉄砲買入れ準備金一万両を担保に，伊豆倉から渡航資金として５千両を融通してもらうように斡旋して欲しいと依頼した。村田は，佐藤倉の佐藤貞次郎に井上らの留学を相談した。佐藤は京都で周布政之助から，かねてより頼まれていたこともあり，この話を主人の大黒屋六兵衛の所に持ち込み，六兵衛から５千両を引き出すことに成功した。井上馨は，藩の御用金を担保に勝手に大金を借り受けた罪を謝罪し，洋行の意志を次のように述べた。

> 宿志を遂げ候わん一念よりしてとは申しながら，形上不正の大金を押し借り，不届千万の至，心事快くは毛頭存じよらず候えども，余り期限は迫り，一応御乞合の上御指揮相待ち次第に候へども，右の策外手段これなく，実に上へ対し，政府を偽り侮り，法典を犯し，罪万死にあたり候えども，僕等この時勢と申し，公へも歎願仕り，同志説を容れず，決志仕り候事，この行を果たさざる時は，なんの面目を以て安然生を全してまたたび帰国仕る意はこれなき故，この金故落命も未だ不平に候間，留て潔く仕候よりも，ひとまず不正の名を受けて進候間，定て上はもとより政府にも御憤怒恐怖奉り候えども，実に時日はなく，止むを得ざる策，私ども心事も御憐察下さるべく候[22]。

５月11日の夜９時すぎ，予定通り五人はマセソン商会の一番館に着く。その場で洋服に着替え，断髪を決意する。当時，断髪と洋装は，武士にとっては屈辱的だと思われたに違いないが，五人は笑ってごまかそうとした。その夜，五人はマセソン所有の小型蒸気船チェルスウィック号（Chelswick）に乗って上海へ向かった。

８月15日に，井上らは中国の近代都市上海に到着した。上海という所は，中国がアヘン戦争でイギリスに負け，開港を要求されたところである。東アジアにおける最大の港として最も繁栄した都市であっ

21）エイベル・アンソニー・ジェームズ・ガウワー（Abel Anthony James Gower，1836-1899）は，イギリスの外交官で，幕末期に箱館および長崎の領事となり，明治初期に兵庫・大阪の領事を務めた。

22）周布公平 監修『周布政之助伝』上巻（東京大学出版会，1977年），135頁。

た。彼らは上海に入って直ぐに，林立した高層ビルや港内の汽船や軍艦に目を奪われた。この時，上海の繁栄を目のあたりした井上は，たちまち「攘夷」という迷いのある夢から覚めて「開国」へと自己の考えを変えたのである。

> 上海に着て見るところが軍艦その他蒸気船，帆前船等を百艘以上，上海で始めてみた。無論それまでは外国の船艦を百艘以上見たことがない。そこで自分もこれはいままで大変誤まつたといふ考が起つるのだ，といふのは，こう大きくもない蒸気船で上海まで三日か四日で着たが，この艦が皆な襲いくるということになつたら，陸に上つた時分には宜しいが，海で方々から攻撃せらるる時分は，防護の奔命に疲れて仕様がなくなる。ついに勝てる目的がない，軍艦等を見ると沢山の大砲がある。その頃，外国の蒸気船には軍艦でなくても大抵大砲を装置してあつた。というのは，支那海などに海賊が出たから，普通の商売船にも大砲を装置してあつたという有様だ，それをただ攘夷と吾々が言たところができない話で，ついに無謀な事して国を亡ぼすに至るだらうといふので，私は周布政之助に上海から手紙を出した。長州藩が攘夷をやるが大なる間違である，物は実際に就て眼を開かぬと大変な違算が起こるといふて，上海の有様などを書て，これなどの艦が一度に日本に攻撃にかかるといふことになれば防御の策が付くものでない，故にいよいよ海軍を我国に興して防御法を立ち，用意ができた以上はいざ知らず，今日攘夷といふては，ついに国を亡ぼすと，詳しく書た書状を出した。ところで彼等は，仕方がない，わずか，支那まで行たのにもはや説を変じた，仕方かない奴だと，こういふのだ。それは帰つてから解つたのだ。その後は外国から手紙等を出したことはない[23)]。

井上馨は，上海に着いた後，外国と日本の力の差を実感し，初めて外国に対しての恐怖感をいだくようになったが、恐怖だけに留まらず，今後の日本はどうやって西洋と対抗するべきなのかという問題が脳裏に宿ったのである。

> 上海に着いた時分に己れと伊藤の間に大議論が起こった，ソレは何であるか云ふと己れは上海に着いた翌朝外国の船舶の輻輳するのを見て「これはいかぬ僅か日本を離れた上海に蒸汽船や風帆船が白艘もあつた，五六日で日本に行ける様ぢや，迚も日本の海岸の防御は付くものぢやない，イクラ攘夷などの云ふて騒いでもこれは国を誤まる，夫よりは国を開いて外国と交際を為し商工業の進歩発達を謀り段々海軍を起こして国の防備をつけなければならぬ」と云つたスルト伊藤は「僅か日本を出て上海に来た位でサウ意見を変へることがあるものか」と云ふので大議論が始まった，それで己は上海で見て感じた所に書いて上海から周布（政之助即ち公平氏の実父）の所に送つた[24)]。

上海に着いた後，野村，遠藤，山居の三人は，ワイト・アツダー号（White adder）に乗り換えてイ

23）末松謙澄 編『維新風雲録：伊藤・井上二元老直話』（哲学書院，1900年），138頁。
24）中央新聞社編『伊藤侯井上伯山縣侯元勛談』（中央新聞社，1900年），73-74頁。

ギリスに向かった。井上馨と伊藤博文の二人は，ペガサス号（Pegasus）に乗ってロンドンを目指した。

井上馨らは４ヶ月と11日をかけて、９月23日にようやくロンドンに到着した。ロンドンで山尾らと合流した後，ジャーディン・マヂソン（Jardine Matheson）の周旋で，井上と山尾の二人は，ガワー街（Gower street）にあるクーパー（Cooper）の家に宿泊し，野村，伊藤，遠藤の三人は，ドクターウイリアムソン（Docter Williamson）の家に寄宿し，英語とイギリスの学問を研修することとなった。

以上のように井上は，上海に着いた後，百艘以上の外国の戦艦，また，一般の蒸気船に大砲を装置している外国の軍事力に衝撃を受けた。これらの衝撃が，井上に「攘夷不能」,「攘夷亡国」などを意識させたが，彼は「攘夷不能」といった思想に止まらず,「開国思想」に転じていく。さらに元来の「海軍攘夷」から「海軍防備」の思想へと転じていくことになる。そして,「海軍防備」を実現するために,「国を開いて外国と交際を為し，商工業の進歩発達を謀」ろうとしたのである，こうした井上の思想的な変化は前近代的な江戸時代から近代へという時代の移り変わりを表わしているといえるだろう。

三　井上馨の帰国と英国公使との交渉

１　井上馨の帰国

ある日，井上馨は英国において、ある記事を見つけた。その内容は，生麦事件の結果，イギリスは艦隊を鹿児島湾に進めて薩摩藩と開戦した事件であり，伊藤らと面会して「我々は出発の頃は攘夷実行の期が己に迫つていたのであるから，益々薩摩ではこれを実行した見える。然らば，我が藩でもこれと競争して下関で開戦したに違ひない」[25] と語り合ったと伝えられる。

元治元年（1864）の春，長州藩が下関で外国商船を砲撃した事件が欧州に伝えられた。もし幕府が長州藩に懲罰を加えなければ，各国は自由に行動することになろうとの説が専ら広がった。井上は，これに耳にしてますます憂慮し,「我々は外国にあつて専心海軍の学術を研究しているのは，他日その術を施さうとするが為である。然るに今や郷国は一大危機に瀕している。もし郷国にして滅亡するやうなことがあつては，海軍の研究もなんの用があらう，それで一旦帰朝し，君公または当路の士に面して欧州の形勢事情を詳説し，鎖国の陋見を破る開国の方針に一変せしめねばならぬ，しかも攘夷論の旋渦中に投じて開国論を唱道することであるから，一死は固より覚悟せねばならぬ。吾々が国家の為身命を犠牲に供するのは素より惜しむところでないから，この際是非死を決して帰朝しては如何か」[26] と伊藤に述べたところ，伊藤もこれに賛成して，ついに二人は共に帰国する決心をした。野村，遠藤，山尾の三人もこれを聞いて共に帰国しようとしたが，井上はこれを止めて「万一僕等帰国後その志を達し得ずして斃れ，後図を為す者がなかつたなら，君等はその時こそ帰国して僕等の後継者となられたい，五人一同帰国して一時に死地に入るのは策の得たものでない。」[27] と説いたので，三人はその意向を理解して残ることになった。

25）井上馨侯伝記編纂会『世外井上公伝』第一巻（原書房，1968年），99頁。

26）同書，101頁。

27）同書，101頁。

その後，井上馨と伊藤博文とはジャーディンに面会して帰国の意志を告げた後，彼は頻りにこれを止め，しばらく当地に滞留して，帰る時機を待つようにと忠告した。しかし，井上と伊藤は，すでに決心していたので，帰国の意志を強く伝えて別れを告げた。３月中旬，彼らはロンドンを出発して，６月初旬に上海に到着した。上海からさらに蒸気船に移乗して，６月10日頃に横浜に帰港した。その後の井上は，日本への帰国について回顧し，次のように語った。

> 国家を憂へる念は，国内にある時より寧ろ海外にあるに於て最も切実なのを覚えた。例へば，藩主は今如何に憂慮して居られるだろうか，同志の士は如何に行動しつつあるか，或は戦敗の結果土地割譲の窮境に陥つたのでは無からうかなど種々の想像を脳裏に描出し，万感常に胸に逼つてわすれようとして須臾も忘れることができない状態にあった[28]。

井上馨はイギリスにおいて，長州藩が外国商船を砲撃したという事件を聞いて，長州藩の対外政策が無策だと思った。そして，日本に戻ってから「鎖国の陋見を破る，開国の方針に一変せしめねばならぬ」と考えた。ここでもまた井上の「開国思想」についての検討が必要だと思う。日本は嘉永６年（1853）６月３日，ペリー来航以来，アメリカ，イギリス，ロシアと次々に和親条約を結んだ。安政５年（1858）にも，イギリス，フランス，オランダ，ロシアと通商条約を結んだ幕府は，西洋列強に対して開国の姿勢を取り続けていった。1864年に井上は再び「開国」を強調した。ここで「国」というのは「日本国」というよりも長州藩の「藩国」といった方が適切だと思われる。すなわち，井上の「開国」という思想の内実は「開藩」であって，所謂「藩国を開く」という意味であった。

２　帰国後の英国公使との交渉

文久三年（1863）５月10日，すなわち井上馨と他の四人が洋行する前日，長州藩は攘夷を実行した。その夜，長州藩においては，米国の商船ペムブローク（Pembroke）号を砲撃したのを始めとし，23日には，仏国商船キャンシャン（Kien-chang）号を豊浦沖に，26日にはオランダ軍艦メデューサ（Medusa）号を砲撃した。そこで米艦は６月１日に，続いて仏艦は同月の５日に海峡に来襲し，長州藩は応戦したが敗戦した。この戦いでは長州の庚申・壬午の両艦が米艦に撃破された。元々長州藩は勅令幕達を奉じて率先攘夷を実行してきたが，列藩はこれを傍観して援助しようともしなかった。当時，攘夷は日本の輿論であったから，各藩は長州藩の攘夷の挙に賛成はしたが，どの藩も幕府の鼻息を意識して，長州藩を援助する藩はまったく無かったわけである。

井上馨と伊藤博文は，イギリスから横浜に帰着すると直ぐに英国の領事ガワーと面会し，帰国の意図を述べて，速やかに英国公使と面会して，攻撃的な方針を緩めて，藩論を一変させることに尽力すべきだという意向を伝え，ガワーに頼ってイギリス公使館の通訳アーネストと面会し，その紹介で公使ラザフォード・オールコツク（Sir Rutherford Aleock）と会見した。井上らは，しばらく出兵の時期を遅らせるようにと懇願した。そうした活動によって英国公使は，他の三国の公使と相談して出兵延期を井上

28）同書，103頁。

と伊藤に伝えたのである。

６月24日，井上と伊藤は，四カ国の公使の手紙を持ち，山口に到着した。26日に井上は，藩主に君前会議を開くことを懇請し，四カ国の代表の覚書を持参すると述べた。しかし，１日中説得しても藩の重役たちはまったく聞く耳を持たなかった。完全に失敗した井上は，スパイと言われたのである。その時の気持ちを後にこう打ち明けている。

> 一旦戦争をしてから和議を結んだのでは取られた土地は返しはしない，いかんに尊王すれば攘夷となる攘夷をすれば尊王となると云ふても国を取られることになれば此国にを付けることに為る国に疵を付けてドウなさる，兵法に彼を知り己を知らんと云ふことがある，軍備と云ふものを整へた後に於て戦ふならよろしいが其軍備もないのにただ外国人の来るのが嫌だからと言つて戦ふと云ふことは道理に於てるべからざることである，夫れより攘夷のため戦ふ兵力を転じて幕府と戦ふて幕府の勢力を打倒す方が宜しい，無謀の攘夷をするのは朝廷のためにも国のためにも防長二州のためにもならぬ。また国が滅びるまでもやれと云ふことと国を維持することは大変に違ふ，故にどんなことをしても今日まで文明社会の利益も取り，政治の仕方など採てさうして，改良を加へた以上で実力の競争と云ふことでなくては，精神計りを以て競争する云ふことはできないことであると御前会議で述べたのだ[29]。

以上のように井上馨は，君前会議でスパイと言われても，「攘夷不能」という主張を断固として保持し続けた。彼は「攘夷」についての意見を述べた上で，外国人が嫌いというだけで攘夷を行うことは無謀なことであると批判した。さらに今後，国を維持するためにどのような方法を採用すればよいのかを述べた。すなわち「文明社会の利益も取り，政治の仕方など採てさうして，改良を加へた以上で実力の競争と云ふことでなくては，精神計りを以て競争する」といったのである。ここで井上が「文明社会」という言葉を用いたのは，彼の近代国家における発展理念の形成という思想にとっての端緒だと考えられる。

> 伊藤と井上が帰つて来て国是を変へる，渠奴等は僅かに外国ニいけば，すぐ説を変ずる多分外国人に買われたのであらふと云ふ様な評が起つた[30]。

攘夷を主張する人々に，このような話を理解させるのは難しい。彼らの固陋な考えを打破するのは不可能であろう。

君前会議後，藩内は井上らを「外夷」のスパイ，あるいは「売国奴」と呼んだ。二人を斬るべし，という激論まで飛び出す始末であった。人々の動揺を抑えるために，６月30日，藩政府はまた攘夷の布告を発して「決戦覚悟」を促した。しかし，長州藩の主力はまだ京都にいるので，藩内は防備が弱く，腹

29）末松謙澄 編『維新風雲録：伊藤・井上二元老直話』（哲学書院，1900年），141頁。

30）中央新聞社編『伊藤侯井上伯山縣侯元勛談』（中央新聞社，1900年），78-79頁。

背に敵を受けることを避けるために，攘夷の布告を出す一方で，四カ国に対しては回答を引き伸ばす手段に出た。その際の交渉役は井上と伊藤であった。

7月19日，国司信濃，来島又兵衛らの率いる長州藩兵が，会津，桑名，薩摩各藩の諸隊と宮廷九門の一つである蛤御門付近で衝突した。「蛤御門の変」である。劣勢であった長州藩側は，幕府及び諸藩によって数時間で撃破された。敗戦の憂き目にあった来島又兵衛らは次々と自刃した。「蛤御門の変」によって幕府は，長州を討つ名目を得た。長州が支持する尊王の立場とは裏腹に，長州は宮廷に仇を為す朝敵の名を着せられた。7月13日，朝議は長州藩追討を決定し，これを受けて，幕府は西国諸藩に対して出兵命令を下した。この時の長州藩は腹背に敵を受ける状況に陥っていた。

7月26日，長州はまた君前会議を開いた。井上に対して杉徳輔と一緒に外国との停戦交渉に当たれと命じた。

8月2日正午すぎ，連合艦隊は姫島沖に達し，翌日，下関海峡に向けて航行した。この四カ国連合艦隊は，9隻のイギリス軍艦を中心に，フランス軍艦を3隻，オランダ軍艦4隻，アメリカの仮装艦1隻からなっている。兵員数は陸戦隊を含めて約5千人であった。

連合艦隊来襲の報に接した藩政府は，急遽，海軍局総督の松島剛蔵と伊藤博文に応接役を命じて，停戦交渉のために二人を派遣した。その後，藩政府はまた井上を呼び出して，和議交渉をするように命令した。井上は，和議の方針は今後も変わらない旨の誓言を藩政府から得て交渉役を引き受けた。8月4日に井上馨は，政府員前田孫右門と山口を発ち，今後は外国船の下関通航を妨げないという藩主の勅書と攘夷期限奏聞の将軍親書を携行した。長州藩が外国船を砲撃したのは，あくまで天皇と将軍の命令に従ったに過ぎないことを相手に弁明するためであった。

井上は，前田を四カ国艦隊の提督キューパー（Sir Augustus Leopold Kuper）のもとにおくり，2時間の発砲猶予を求めることにした[31)]。彼は日本の諸隊に対して承諾の回答を与えた。しかし，井上が阿弥陀仏の埠頭から小舟に乗って漕ぎ出したときには，すでに約束の時間が1時間を過ぎていた。

1時間が過ぎたことから，四カ国艦隊は一斉に発砲して戦闘を開始したのである。下関戦争，あるいは馬関戦争と呼ばれる戦いが勃発した。

その後2日間の戦闘で長州藩側は，死者12人，負傷者30人を出し，砲台を連合艦隊に占領され，あげくの果てに破壊され，多くの大砲を持ち去られた。

開戦後に井上馨は，一旦戦争が始まった以上，その身が滅びようとも，あくまで戦うに如かずと決心する。

> 七ツ時前既に波戸場え罷出候處，彼より及砲撃，終ニ縦是も打出し，策略悉く討破れ，遺恨遺恨，此陸戦と相心得申候，尊兄も御亡父の御事も御座候得ども，是非山口迄御出被成候而，力士隊も四

31）キューパー（Sir Augustus Leopold Kuper, 1809-1885）はイギリスの提督。1823年海軍に入り，40年のアヘン戦争のとき，最初は舟山，次いで広東に転戦，61年に少将に進級，中国派遣艦隊司令官となり，62年の太平軍攻撃を助ける。文久2年（1862）に生麦事件が起ったため，同3年に横浜に赴き，代理公使 E. S. J. ニールを助けて鹿児島砲撃，次いで同4年には下関砲撃の連合艦隊を指揮した。

拾人計御座候様承り候ば，何卒諸隊之内御奉公此時と奉存候。御互ニ千挫萬励可仕候[32]。

7日に藩政府は，小郡代官所で会議を開き，幕府征討軍と共に四カ国艦隊への対策を検討した。席上，藩政府は，四カ国と和議を結ぶ旨の見解を出してきたが，井上はあくまで徹底抗戦を主張した，腹背に敵を受けようとも，開戦したからには，国が滅びるまで徹底抗戦するという方針，これが井上馨の「一貫性」であろうか。井上が割腹して果てようとしたのはこの時である。「一日社稷を存すれば，臣子一日の責を尽くす」[33] という言葉を井上は吐いたのである。

同日の夕方，世子定広は井上を呼んで，国を維持する策に力を尽すべきだと述べ，「止戦講和」の四文字を書いて井上に渡した。井上はその講和の真意が分からず，依然として抵抗の主張を繰り返した。定広は「以権道講和」[34] という五文字を書き，この五文字を読んだ後に，権道の意は何か，と聞いた。外国と契約を結ぶというのは一時の権謀，すなわち策略で，本心から出ているものではない。井上はこの説明を聞いた後，次のように語っている。

然れども，外国と和を講ずるのは一時の権謀で，雪冤の目的を達した後は，再び攘夷を為す思慮なることはいはずして明らかである。今の日本人は外国人を呼んで禽獣となすであらうが，よし犬であるとしても詐謀を以てこれを呼び近くづけながら，彼が頭を低れ尾を掉はして来り親しむを見て，不意にその頭を擲つ時は，彼必ず再び近づきはしまい，況んや外国人が無智の獣類ではなく，信義を重んずる人類であるから，一旦和約を結びながら，故なくして再び戦を挑むやうな不信不義の行為に対しては必ずこれを膺懲する挙に出るだろう。かかる詐道に出るよりも，寧ろ本日飽くまで決戦し斃れて後已に如ぬ[35]。

その後，定広はまた「以信義講和」という五文字を書いて示した。これで藩政は「和議」を選ぶことに決まった。

8月8日午後，ユーライアス（Euryalus）号の艦上で講和のための会議が始まった。6日間もの日数を費やして，ついに条約が締結されたのである。

1，今日より以後総じて外国船馬関通行の節は，懇切に取扱を加ふべし。
2，石炭・食物・薪水，其外船中入用之品売渡すべし。
3，馬関海湾風涛つよき處故，風波之難に逢ひし時は，無障上陸すべし。
4，新規に台場を調るは勿論，古き台場を繕ひ，幷に大砲置まじき事。
5，馬関町より始めて外国艦に向ひ砲発せしによって此度可及焼失之處，焼ざる故，其の償金を出

32）井上馨侯伝記編纂会『世外井上公伝』第一巻（原書房，1968年），154頁。
33）同書，146頁。
34）同書，150頁。
35）同書，151頁。

す事。其外に軍之雑費を出す事之二ヶ条，江戸に於て四ヶ国欽差より決定する之段承知致事[36]。

下関戦争が勃発した後，井上はあくまで徹底抗戦を主張した。「一日社稷を存すれば，臣子一日の責を尽くす」という井上の言葉から考えれば，西洋思想に影響されても，彼の思想の根本にある部分は，やはり藩主に忠を尽くすものであった。すでに引用した「国家を憂へる念は，国内にある時より寧ろ海外にあるに於て最も切実なのを覚えた」という文章からいって井上は，愛国思想を持ってはいたが，藩主に忠を尽くす意識をより強く残していたことがうかがえる。こうした立場は，幕末期の開明武士階層にとって，避けることができないものであったことは間違いない。

おわりに

本稿は，主として幕末期の井上馨の思想の変遷に注目し，井上の洋行体験の経緯を明らかにして，洋行前後における思想の変化は大体四段階にすると次のようになる。

①鎖国攘夷，②海軍攘夷（師夷之長技以制夷），③攘夷不能・海軍防備，④対外開国。

ただしここでの「開国」の「国」は「日本国」というよりは，長州藩の藩国という方が適切だと思われる。つまり，井上の「開国」思想の内実は，「開藩」であって，所謂「藩国を開く」という意味とする。

しかし，下関戦争が勃発した後，井上はあくまで徹底的抗戦を主張した。西洋思想の影響を受けたとはいえ，彼の思想の根本にある部分は，また藩主に忠を尽くすものであった。当時の彼は，愛国精神はもっていたが，藩主に忠を尽くす意識がより強く残っていた。これもおそらく，幕末期の開明武士階層において，避けることのできない意識であったと思われる。

社会の秩序の改革に伴って，人間の認識も変化する。しかし，個々の人間が旧来の観念を完全に捨て去り，新たな体系を受容できるとは考えにくく，もとある枠組みに基づいて，現実への対応を図るはずであるから，このことは自他認識の相克と言い換えてもよい[37]。こうした自他認識は，井上にとって完全に自覚的なものであったとは限らない。つまりそれは，他者を媒介として始めて身に付いたものである。したがって井上は，佐久間象山からは海軍攘夷の意識を，そして上海見聞からは攘夷不能の意識を受けとって，自己の思想と政策を築き上げたといえるのである。

36）末松謙澄『防長回天史．第４篇下（第６）』（末松春彦，1921年），165頁。

37）奈良勝司『明治維新と世界認識体系　幕末の徳川政権　信義と攘夷の間』（有志舎，2018年），２頁。